

生涯学習実践の学習課題に関する理論的考察

— A. H. マズローの欲求理論の批判的継承を軸として —

佐々木 英 和*

A Theoretical Consideration on Learning Subjects of Lifelong Learning — A Study Based on the Critical Succession of the Needs Theory of A.H.Maslow —

Hidekazu SASAKI

The aim of this paper is to reconstruct the theory on learning subjects, taking account of the actual aspects of human life, and the method of it is to examine what human needs and desires are like, as a basic consideration. In this paper, I succeed critically to the needs theory of A.H.Maslow.

Firstly, by reinterpreting his theory of human motivation, it can be regarded as the one thinking much of one's relationship with others. Secondly, in taking his studies as a whole about human needs into consideration, it is concluded that two fundamental units which constitute his theory are "the human needs for continuing to live as a life itself" and "the inevitable needs for realizing the values of his or her own existence as a human being".

Succeeding to these viewpoints, I attempt to propose an essay on the basic theory which can play a role in a standard of practices of lifelong learning.

目次

はじめに

I マズローの欲求理論を検討する上での予備的考察

A マズローの欲求理論を検討する理由

B マズロー理論に対する一般的批判の論点

II マズローの欲求階層論の再解釈

A 欲求階層論の全体像

B 欲求階層論に関する補足的論点

C 欲求論から価値論へ

D 生の手段的欲求と目的欲求

III 学習課題論に向けての試論的構成

A 欲求理論の構成要素

B 生きがい欲求の位置づけ

C 欲求領域の三角形

まとめにかえて

はじめに

生涯学習の重要性が語られる際には、現代人が物質的には満たされているにもかかわらず、精神的満足度についてはまだまだ不十分であるというような理由で、後者の意味での満足の実現が強調されることが多い。たとえば、生涯学習を「生きがい学習」というように言い換えることが流行したり、高齢者の生きがいづくりという文脈で生涯学習が注目される点に顕著である¹⁾。このような状況は、学習概念が時代とともに変容していることを示すとみなすこともできる²⁾が、それと同時に、学習活

* 大学院博士課程

動の具体的内実を改めて検討するべき必要性を示唆していると言えるだろう。そして、ここで必要とされる重要なことは、人間の生の全体像を総体的に捉え直すことが基盤にならなければならないということである。

学習活動は、学習者自身が自覚的・無自覚的とを問わず、何らかの形で設定された「学習課題」を克服もしくは達成することに向けて行なわれている。ここで、「自覚的・無自覚的とを問わず」という言い方をしているのは、たとえば活動自体が表出的であるために学習課題とは全く無縁に見えるようなものすらも必ず何らかの暗黙の学習課題が内包されていることを示唆する必要性があるからである。

ところで、これまでの社会教育および生涯学習の実践および研究においては、学習課題については一般に「生活課題」や「地域課題」という名で、漠然と抽象的な総括がなされていた。たしかに、学習者個々人、また各地域地域によって事情が様々であり、当然のことながら学習課題も多様であるから、生活課題とか地域課題というような括り方は、ある意味で非常に包括的で無難なものである。だが、問題とするべきは、多様性をただ多様であると言うことでとどめている限りにおいて、場当たりの経験主義的な学習課題論であることから一向に脱却できないことではないだろうか。そのようなレベルにとどめず、その多様性のあり方に何らかの一般性を読み取るなりして、多様のあり方を整理するべき必要性が、純理論的というよりも実践の便宜として迫ってくるのではないか。また、理論的なレベルにおいても、多様性や差異は、一般性・普遍性に取り込まれたり葛藤していく中でこそ、その意義を発揮できるものであり、それらが相対主義的状况にただ放置されるだけでは、多様性や差異の真価がかって減退し、多様性が抑圧される契機を自らつくり出し、ひいては自殺行為につながりかねないのではないだろうか。いずれにしろ、個々人および個々の地域の特殊性を抑圧するためでなく、むしろ尊重し解放するためにこそ、いったんは「普遍性」というものを構築してみるという戦略が必要である⁹⁾と考える。

では、以上のような課題意識は、どのように展開されるべきなのだろうか。筆者は、人間が学習するという行為を行なうことについて総体的かつ本質論的に把握するための基礎作業として「欲求」に注目することが有効である¹⁰⁾と考える。というのは、“あらゆる虚妄をとり去ってみれば、価値の究極的な根拠は、具体的な人間の欲求ということ以外にはない”¹¹⁾のであり、欲求を全体論的に把握することによってこそ、人間の生の全体像を把握しながら、かつ本質もしくは本質らしきものへと迫っていくことが可能になると考えられるからである。

生涯学習実践とは、もっとも広義に捉えるならば、ある個人が生まれてから死ぬまでのすべての生活時間において進められているものである。逆に言えば、人間が生を営むということを経験している限りにおいてこそ、生涯学習実践が存立できるのである。このような究極レベルまで掘り下げてみれば、生涯学習の学習課題とは、「生きる課題」そのものである。したがって、「人間が生きていくということ」、もっと具体的には「個人個人が人間として生きていくということ」はいかなることか、が本質的な問題として問われなければならないというわけである。この「生きる課題」という、潜在的ではあるが常に基盤となっている学習課題を明らかにするための方法として、筆者は欲求理論を検討しようというわけである。

I マズローの欲求理論を検討する上での予備的考察

A マズローの欲求理論を検討する理由

これまで展開してきた問題意識に基づいた検討を進めるために、この論稿においては、アメリカの有名な心理学者である A. H. マズローの欲求理論を検討することを出発点にする。この理由は、主として、以下のようなものである。

第一に、マズローは、欲求論を展開しながら、「自己実現」という究極の価値を示しているからである。もちろん、このような形で究極価値が提示されてしまうことがはたして妥当であるのか、また、そのような理論構成自体が人々を強迫観念に駆り立てるという意味で暴力的なのではないのか、というような形で問題性を孕んでいることについては、あらかじめ自覚しておかなければならないし、これらについての検討を深めていく研究も重要である。それにもかかわらず、筆者が、人間が生きていく上での究極価値を求めるという衝動を重視するのは、筆者の目的が諸々の欲求を単にリスト化していくことではなく、いわば「究極」を軸としたある種のガイドラインをいったん創造してみようとしているからである。

たしかに、「ほんとう」という形で究極の価値が存在しているかどうかは非常に疑問であるし、そのようなものの存在を前提としてしまうことにこそ、大きな問題点が含まれている。しかし、人間という生きものは、「ほんとう」のものがあるかどうかは不可知であるにもかかわらず、「ほんとう」のものを求めようとする衝動を持っていることは否定しようのない真実と言えるのではないだろうか¹²⁾。また、歴史的事実を参照するにしても、「神」の問題などが古来から問題とされてきたのは、この「ほんとう」を求める人間の衝動と大いに関係があるとみなせるからである。このように、哲学が伝統的に追究してきた「ほんとう」という問題を射程に入れるためにも、

マズローが自己実現という価値を提示したことに注目する必要がある。

第二に、教育や学習活動という領域において、マズロー欲求理論の影響力が非常に大きいからである。マズローの提唱した「基本的ニーズ」という考え方は、アメリカ本国だけでなく、世界的に広まり、教育・学習活動における実践的指針の土台に据えられるものとして普及した。筆者は、このような理由によって、マズローの欲求理論を世界に普遍的に通用するものだと言いたいわけでは決してない。このような状況だからこそ、批判的に検討する必然性が大きいとも言えよう。しかし、理論の影響力が現実的に大きかったという事実を肯定的に評価するならば、そこに何らかの説得性があったとみなすべきであろう。そして、この説得性とは、筆者によれば、この理論には、経験則によって合意しやすいものが多かった部分だけでなく、単に表面的現象にとどまるものではない、人間の生の根本的あり方に触れる部分が内包されているということである。

マズローの欲求理論および自己実現論は、そのような理論が登場してきた時代的背景・地域的背景、すなわち1950年代のアメリカという文脈を抜きにして普遍的なものとして流通することが先行してしまっている。この一つの原因は、後述する「欲求階層論」が一見して図式的にわかりやすかったために、そのわかりやすさゆえに理論に対する批判意識を弱めてしまい、普遍主義的神話を構成しやすかったというところにある。そして、エドワード・ホフマンが指摘するように、マズローほど“信奉者と誹謗者のいずれからも誤解を受けている知識人は珍しい”⁶⁾という事態が生じているのである。マズローの欲求階層論が人間的な諸現象を説明するのに便利であったことは、この図式の勝手な独り歩きを許した。そのため、マズローを信奉する側からも誹謗する側からも勝手な思い込みが生じて、大きな誤解が形成されたのである。このような事態から想像されるように、これまで、マズロー欲求理論は、その原典を十分に確認されることのないまま、「孫引き」的に流用され続けてきた。この点を克服するためにも、マズロー理論について創造的かつ実践的な読み方をすることが重要かつ緊急であると考えられるし、受動的な理由ではあるが、マズローの欲求理論を再検討すべき第三の必然性がここにある。

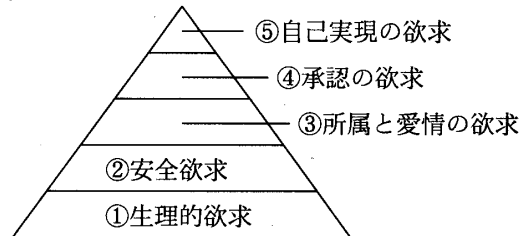
以上のような理由で、筆者は原則的にはマズローの理論を批判的に継承するという立場に立つことにしよう。この理論に安易に追従することは避けながらも、理論的にも実践的にも多くの示唆を確認しつつ、反省すべき点や問題点については再検討していきたい。

B マズロー理論に対する一般的批判の論点

マズロー理論を批判しつつも、基本的には継承している、現代社会の生涯学習実践へと生かしていくという立場を取るに当たって、彼の理論が普及するに伴い、それに対して展開されてきた批判のうち比較的一般的なものの論点を確認しておく必要がある。ここでは、原則として、筆者がマズロー理論を擁護する立場に立って議論を展開することにしよう。

マズローという名前を聞いただけで、「欲求階層論」を思い浮かべる人が多い。この欲求階層論とは、大雑把な枠組みだけを見るならば、図表1のように、欲求を①生理的欲求、②安全欲求、③所属と愛情の欲求、④承認の欲求、⑤自己実現の欲求、というような五つの水準に分けて、下から上へと階層的に構成したものである⁷⁾。そして、マズローに対する肯定的な評価も否定的な批判も、この欲求階層論に集中しているのである。このような批判のパターンは、主として、マズロー理論がイデオロギー装置として機能していくために暴力性を持ったものであるとする、理論の社会的な機能への批判と、理論そのものが人間の生の事実性と照合させて妥当であるかどうかを疑うというような理論内在的な批判との、二つのレベルに分けて考えることができる。

図表 1



マズロー理論のイデオロギー性に対する批判の代表的なものは、マズローの自己実現理論がいかにもプチブル的な人間観を持っていることの問題性である⁸⁾。すなわち、欲求階層説が適切なものであるということを前提とするのならば、自己実現とは、十分に衣食に足りた人々だけに許される特権になってしまうものであり、この理論が経済的な意味で貧しい人々を抑圧するというものである。たしかに、この理論を額面どおり受けとめるのであれば、この指摘は至極もつともなものである。だが、そうだからといって、マズローの理論構成が不適格であるということの直接的な証明にはならない。このタイプの批判は、自己実現という理想は、経済的な条件の如何を問わず万人に開かれていなければならないというような、暗黙の倫理的規範を前提としたイデオロギー的な批判の域を出ないものである。このような規範を前提とし

て理論のあり方を裁断するという批判と、人間の欲求が
いかなる傾向性を持つのかという事実性において批判す
るレベルとは安易に混同してはならない。自己実現が万
人に開かれたものであるというのはマズロー自身が描い
ているロマンティシズムである⁹⁾けれども、そのことが
実際に実現する条件とは厳密に分けて考えなければなら
ない。

また、前平泰志が“マズローの言うところの人間ニー
ズの低次の次元である「より緊急かつ物質的性格を帯
びた」身体的ニーズが、世界的な開発戦略のなかにおい
て「生存のミニマムな標準」＝「基本的人間ニーズ」を
保証する、より一層洗練された普遍的な概念として作り
替えられていることを問題にしておこう”¹⁰⁾という姿勢
を示していることに注目しておかなければならない。前
平が問題としているのは、直接的にはマズロー欲求理論
ではなく、むしろその背景となっている近代主義的な普
遍主義である。この点では、マズロー理論そのものより
もマズローの理論の構成のされ方が問題にされているの
であって、理論の根幹に潜んでいる普遍主義を攻撃して
いると言えよう。

さらに、前平が文化人類学や社会学の知見をもとに、
“食へのニーズがまずあって、その後に食物のシステム
がつくられる、というのではなく、食物システムそれ自
体が文化的志向性から形成されたものなのである”¹¹⁾
ということを指摘するとき、マズローの欲求階層論の妥当
性は根本から否定されている。しかし、この指摘は、マ
ズロー欲求論を全面的に否定するに至るほどには強力な
説得力を持っていない。たしかに、“食のような生物学
的、生理学的領域に帰属する部分が多いものでさえ、社
会的に、文化的に強く決定されている”¹²⁾ことに対して
は異論のないことである。だが、そのことがそのまま、
社会的・文化的な条件こそが生物学的・生理学的領域の
問題を根底から規定するということの証明にはならない。
人間は、生物学的・生理学的存在であると同時に社会的・
文化的な存在であるというように多重規定を受けている
のだから、結局はアプローチの仕方の違いから生まれる
相対的な解釈の違いにすぎないということになる。たと
えば芸術活動といった社会的・文化的な行為すらも、生
物学的・生理学的に強く規定されているという言い方も
可能であり、すべてが相対主義的に解釈されうるとい
うことになる。にもかかわらず、前平がボードリヤールを
援用しながら“マズローの一見常識的に見える考え方こ
そがむしろ倒錯的”¹³⁾であると言い切ってしまうのは、
根拠の脆弱な強弁にすぎず、極端に偏ってしまった議論
のバランスを回復させようとする中和剤として戦術的意
味を持つ以上のものではない。

もちろん、マズローの理論が“通文化的な検証を経る
ことなしに全世界に汎用されて行くとき、この「基本的
ニーズ」という概念は抑圧的な力へと反転する”¹⁴⁾とい
う指摘は妥当なものである。しかし、ここでの批判の要
点も、マズロー理論が普遍主義の流布の道具として機能
することの問題性であり、マズロー理論に対する内在的
批判が展開されたわけではない。ここでは、いかなる理
論と言えども、理論そのものが独り歩きするときにはそ
れは必然的な宿命として暴力化していくものであり、も
しくはそのような欠陥を内在しているということが、理
論そのものが人間の生の事実性に照合して妥当か否かとい
うこととはいったんは別次元で考えられるべきことを
確認しておくだけで十分であろう。

II マズローの欲求階層論の再解釈

これまでのマズロー欲求階層論は、図式的な取り上げ
方をされ、単純に教科書化されるか、一方的に裁断され
るかのどちらかの宿命にあった。マズローの理論を鳥瞰
しながら¹⁵⁾、原典に沿った形で丁寧な吟味をしていく必
要がある。

A 欲求階層論の全体像

まずは、欲求階層論の全体像を捉えることにしよう。
先に示したような五つの水準の欲求は、あくまでも基本
的構成であり、マズローが欲求論を力動的に展開する上
での土台の土台にすぎないものであった。また、このよ
うな欲求の構成は、マズローの研究においてはあくまで
も初期のものにすぎない¹⁶⁾のであり、その後において様
々な展開を示していることも確認しておきたい。

先に示した五つの水準の欲求は、その内実に注目する
のであれば、①人間の存在の基盤となる欲求、②他者と
の関係性を求める欲求、③自己実現の欲求、という三つ
のグループに分け直すことができる。このような概念操
作を行なうほうがかえって、マズローの欲求階層論につ
いて、その理論的な意義を明らかにできるだろう。

1) 人間の生存の基盤となる欲求

第一段階の欲求である生理的欲求とは、食欲・睡眠欲
など、人間が生命を維持する上で不可欠の条件を獲得し
ようというものであり、この欲求が満たされない場合に
は、生命が維持というレベルにおいて根本から脅かされ
る。第二の段階の安全欲求も、個体の生存の根本に関わ
るものである。もちろん、安全が完全に確保されなくとも
生命が必ずしも死に至るとは限らないが、度を過ぎた
危険は死を招く。このような意味で、これらの二つの欲
求とは、死を避けようという欲求であり、生存の基盤を
確保しようという欲求である。これらの欲求は、これら

の欲求が満たされている人間が抽象的な概念的思考を巡らせる水準においては消滅させることができそうであるが、緊急に迫られる場合には、人間の具体的な行動の基盤に位置している。行動する当事者が無自覚であろうとも、基本的な方向性として、これらの欲求を満たそうとするのである。

たしかに、人間には、安全を求める欲求と同時に、安全よりも冒険を求める欲求もあるという二面性があり、この点についてはマズローも指摘している¹⁷⁾。だが、重要な論点とは、安全を求める欲求のほうが、冒険を求める欲求よりも一般性が高く、より規定的であるということである。言い換えれば、安全性が確保できている現状だからこそ、危険性や冒険を求める将来を欲するのであって、危険な状況に置かれ続けることを求めるというわけではない。また、人間の冒険欲求とは、生死を賭けてまでのものは少ない。さらに、そのような欲求が極端化した場合においてさえも、自らの死に対して無限に近づこうとする欲求であっても、自らの死そのものを実現しようという欲求であると解釈することはできない¹⁸⁾。

マズローが自らの経験と生物学的な知見とを重ね合わせることを土台として導き出した二つの水準の欲求は、人間を「認識的」というより「存在的」に規定するものであり、人間が生物体として生きる上での本能として位置づけられる。人間という存在は、抽象的な人間である以前に、具体的な生物であり生命体であるという哲学を読み取るべきである。ただし、同時に、このような規定はあくまでも初期条件にすぎず、必ずしも最終的条件になるわけではないことも確認しておかなければならない。というのは、後ほど検討するように、欲求充足のあり方自体が、人間の自己規定を根本から変換させてしまうという逆説も起こりうるからである。

2) 他者との関係性を求める欲求

マズローによれば、これまで述べられてきたような生存を確保しようとする欲求を土台として、次のレベルの欲求が出現するとされる¹⁹⁾。第三水準の欲求として指摘されるのが、「所属と愛情の欲求」である。つまり、自分自身が何らかの集団に所属していたり、自分以外の誰かからの愛情を受けていたいと望む欲求である。この欲求の段階は、人間が自己実現の欲求を出現させる途上の存在としては、孤独なままでは十分な満足度を持って生きていくことができないということを示している。

さらに、第四水準の欲求として、他者から承認されたり尊重されたいという欲求が出現する。この欲求は、“強さ、達成、適切さ、熟達と能力、世の中を前にしての自信、独立と自由などに対する願望”と“(他者から受ける尊敬とか承認を意味する)評判とか信望、地

位、名声と栄光、優越、承認、注意、重視、威信、評価などに対する願望”とに二分できるとされる²⁰⁾。つまり、自分が自分自身に対して自己満足できる状況を求める対自的で能動的な方向性を持つ欲求と、他者に対して自分自身のことを承認してもらいたいという即他的で受動的な方向性を持つ欲求とに二分される。

第三水準と第四水準の欲求は、個体が個体として単独に実現することが不可能なものであり、必ず何らかの他者(一般的には人間存在)を媒介とすることを要求するものである。このような意味で、この二つの水準の欲求は、「他者との関係性を求める欲求」として一まとまりにグルーピングできる。さらに踏み込んだ言い方をすれば、他者を媒介として自己存在の価値を確認しようとする欲求と言い換えることができる。このように他者との関係性を求める欲求のグループと、生存を確保しようとする欲求のグループとでは、明らかに性質的な違いがある。まず、後者が「生物体としての人間」というレベルで求める欲求であるのに対して、前者は、いわば人間らしい欲望などが渦巻くような「人間としての人間」というレベルの欲求である。また、原理的な問題としては、後者は一般に量的次元に還元できる完結可能なものであるのに対して、前者は必ずしも量的次元に還元できないというような質的なレベルにおいて無限に展開するものである²¹⁾。このように見てくると、マズローの欲求階層論とは、第一・第二水準から第三・第四水準に移るプロセスにおいて、明らかに質的転換をして展開しているものであるということを確認しなければならない。

3) 自己実現の欲求

生存を確保しようという欲求、他者との関係性を求める欲求の出現を土台として、最後の段階の「自己実現の欲求」が出現することになる。この欲求についてのとりあえずの定義を引用しておこう。

これらの欲求(生理的欲求、安全の欲求、所属と愛情の欲求、承認の欲求=筆者注)がすべて満たされたとしても、人は、自分に適していることをしていないかぎり、すぐに(いつでもはないにしても)新しい不満が生じ落ち着かなくなってくる。自分自身、最高に平穩であろうとするなら、音楽家は音楽をつくり、美術家は絵を描き、詩人は詩を書いていなければならない。人は、自分になりうるものにならない。人は、自分自身の本性に忠実でなければならない。このような欲求を、自己実現の欲求と呼ぶことができるであろう²²⁾。

ここで、「～なければならない」という日本語表現に惑わされて、義務や当為として自己実現を捉えてはならない。この部分の原文は“must”となっているが、これ

は必然・当然という意味合いで用いられているとみなさなければ、意味がそぐわない。というのは、自己実現は、自分自身にとって外的な条件によって外から規定されるものとしてでなく、個人のやむにやまれぬ内発性から生じる必然性として考えられているからである。自己実現とは、“人の自己充足への願望、すなわちその人が潜在的にもっているものを実現しようとする傾向”であり、“よりいっそう自分自身であろうとし、自分がなりうるすべてのものになるようとする願望”である²³⁾。

自己実現の欲求が実際に現象化する形は、人により大きく異なり、個人差が大きく、多種多様である点²⁴⁾を考慮すると、自己実現の欲求とは、多様で个性的に「自分らしさ」を發揮し実現しようとするものであると言える。また、同語反復的であるが、「自分らしさ」という言葉で抽象的に総括されるものが、個々人にとっては具体的に多様な個性であるのにはかならない。

ここで、欲求階層論を鳥瞰するという位置から、自己実現を位置づけ直しておこう。「所属と愛の欲求」および「承認の欲求」を内容とする「他者との関係性を求める欲求」とは、この理論構成に従うと、自己実現へと至るための規定的な土台である。そうすると、他者との関係性に対する満足を経験することとは、自己実現へと至るための力動的な必要条件であることは示しているが、必ずしも自己実現しているときの静態的な必要条件であることを示してはいない。むしろ実際問題として、マズローが自己実現に至っている人間の特徴として、自分が所属している文化から超越しようとする性向があることが挙げられる²⁵⁾ように、他者との関係性は二次的なものとなる。だが、自己実現が他者との関係を拒絶したものであるわけではない。自己実現に至るまでの段階においては他者依存的に自己規定していたのであるが、自己実現している段階においては他者に依存せず自立しつつ自分で自分のことを肯定しながらも、他者との関係性を大切にすることができる。

自己実現という言い方をしてしまうと、他者との関係性は背後に隠れてしまうことが多かった。しかし、欲求階層論を解釈し直すと、自己実現へと至るプロセスとして他者との関係に依存せざるをえないほど、自己と他者との関係が重要なことが確認できると同時に、自己実現に至るためにこそ、他者との肯定的な関係性を規定的条件としなければならないことが判明するのである。このような点で、欲求階層論とは、個としての自己が独立して自己実現することは非常に困難であり、自己実現までのプロセスとして、他者の存在がいかに重要かを示した理論であると解釈し直すことができるのである、したがって、欲求階層論とは、形式的には見えにくくとも実質的

には他者との関係性を強調した理論であると解釈し直すことができる。

B 欲求階層論に関する補足的論点

欲求階層論が、その内容的な構成においても、また欲求出現の順序などの形式的な構成においても決して固定的で不動であるというものではないことは、マズロー自身が注意を促していることである。

マズローは、自己実現に至るまでに四つの水準に分類した欲求のことを「基本的欲求」と呼んでいる²⁶⁾が、それ以外にも「知る欲求」や「理解する欲求」を指摘している。マズローによれば、一般的に、知ることや理解することは生きる上での手段的なものにしか位置づけられない傾向にあるが、知ろうとしたり理解しようとする欲求が、基本的欲求と同様に扱われるべきことを指摘している²⁷⁾。また、マズローは、自分の研究の不十分さを認めつつも、「審美的欲求」を基本的な欲求と同様に扱わなければならない可能性を示唆している²⁸⁾。

また、欲求階層論そのものについても、①欲求階層が決して不動というものではなく、たとえば自尊心のほうが愛を求める欲求が強いというような逆転が生じうること、②欲求の充足度は絶対的ではなく、あくまでも相対的なものであること、③欲求の充足については、人々がたいていは無意識的であること、④基本的欲求を分類したことは、あらゆる文化に普遍的で一貫したものであることを主張しようとするものではなく、表面的な相違からみて相対的に根源的・普遍的・基本的な特質へと近づいていくための方法にすぎないこと、などを付け加えている²⁹⁾。特に、四点目は、欲求階層論が、マズローの方法意識に基づいて構成された目安であることを語っていて、この図式があたかも絶対的基準のごとく教義化されることは、マズロー自身が予想だにしていなかったことであろう。実際、マズローの中期・後期以降の研究において、この図式が前面に出てくることは全くと言ってよいほどなかったのである³⁰⁾。

C 欲求論から価値論へ

先にも述べたように、欲求階層論は、マズローの研究人生の中でも初期に提案されたものであり、欲求についての議論が深まっていくと同時に、価値論などの関連性を持ちつつ立体的に展開していった。このような展開を見せた欲求理論の中でも特に重要なことは、「欠乏欲求」と「成長欲求」とを対比し、後者を強調したことである。

欠乏欲求とは、“有機体において本質的に欠けているいわば空ろな穴であり、それは健康のためにみたまされね

ばならず、しかも、主体以外の人間によって、外部からみたされねばならない”³¹⁾という性質のものである。これに対して、成長欲求とは“定義するよりもむしろ、指摘することができる”³²⁾というものでしかないが、一応の目安として、“安全、所属、愛情、尊敬、自尊心に対する基本的欲求を十分満足してる”人々が自己実現へと向かう傾向により動機づけられるものである³³⁾。つまり、欲求階層論をもとにするのであれば、図式的には、第四水準の欲求と第五水準の自己実現欲求との中間項に位置するものが、成長欲求として挿入されたと考えられる³⁴⁾。

この成長欲求に該当するもののリストとしては、全体性・完全性・正義・躍動性・美・善などといった価値論的なものが羅列されている³⁵⁾。ここに、マズロー欲求理論の特徴が現われている。すなわち、上田吉一が指摘するように、欲求を価値形成の基本的動因とみなして、“欲求と価値とは対立するものではなく、人間の価値は人間の欲求から生ずることを強調した点”である³⁶⁾。ただし、ここでの「価値」とは、肯定的な方向性で用いられるものが主であり、負の意味での価値についてはほとんど考慮されていないところに、マズローの限界性がある。にもかかわらず、この考え方に注目しなければならない理由は、人間がただ生きるためにのみ生きるのではなく、また価値を実現するためにだけ生きるのでもなく、双方の側面を見据えながら、それらの志向性の出現を力動的かつ統合的に把握する道を開いたからである。

個人がその個人にとって肯定的な価値を実現しようとするということについて、若干の補足的考察をしておこう。ここで注目するのは、自己肯定的な価値の実現における他者の位置づけの転換である。まず、何かの集団に所属したり、愛されることを求める欲求も、また他者から承認されることを求めたり、自尊心を確立させようとする欲求も、自己肯定的な価値を実現しようとする欲求であるが、価値実現の水準はあくまでも、「閉じた個」という意味での自己にとどまっている。言い換えれば、「閉じた個」としての自己のレベルにしか価値実現のベクトルを向かわせていくだけの余裕しか持つことができないという段階である。これに対して、成長欲求の段階においては、価値実現の対象は、「閉じた個」としての自己にとどまっていないばかりか、自己と他者との境界を越えて社会的な広がりを持っている。すなわち、価値の実現は、自己肯定的かつ他者肯定的な方向で、いわば「開かれた個」のレベルでの遂行へと向かうのである。したがって、基本的欲求レベルで他者との関係を求める欲求のレベルにおいては、他者の存在は自己充足のための手段であるという意味合いが強かったが、成長欲求のレベルにおいては、他者の存在はそれ自体が目的であるという意

味合いが増していくのである。

以上のように見てくると、マズローの欲求理論とは、自己肯定的な価値を実現しようとする方向性において、他者との関係の質が変換していくことを描いたものとして読み解いていくことも可能なものであることが明らかになる。

D 生の手段的欲求と目的的欲求

欲求階層論が成立するための暗黙の前提とは、各々の水準の欲求がそれぞれ自己目的的であり、その点で独立性の高いものとして単独で語りうるということである。しかし、この前提こそが、欲求階層論をスタティックなものに安住させてしまっている。ここで、マズロー自身が欲求を理論的に考察する際の出発点として意識していることを確認しておこう。ただし、このことは、欲求階層論の中にダイナミックな力動的性質を内包することができる反面、単純に美しく仕上がった理論を解体してしまうことでもある。

日常生活における平均的な願望について注意深く調べてみると、少なくとも重要な特性があることがわかる。すなわちその願望は、通常それ自体が目的的なのではなくむしろ目的に至る手段なのである。我々は、自動車を手に入れたいために金がほしいのである。それも結局は、近隣の者が車をもっており彼らに劣等感を感じたくないために車がほしいのであり、自尊心を保持し続け、人に愛され尊敬されるためなのである。意識された願望を分析してみると、その背後にはいわばさらにその個人にとって基本的な目的が存在することがわかる³⁷⁾。

このような例に見られるように、具体的な欲求というのは、「手段-目的」の無限連鎖によって掘り下げていくことができる。そして、このような操作を進めていくことによって、欲求の抽象度は高まっていく。筆者は、この抽象度の行き先が、結局は、「人間が生命体として生き続けていくための欲求」と「人間が人間らしく自らの存在価値を実感していくことを求める欲求」というレベルを究極の二つの目的とするものと考えている。マズローの欲求階層論の単純化を進めれば、結局は、この二分法に還元でき、前者が後者より規定的であることを示すものであるにすぎないと言えよう。

ここで、生きることそれ自体を自己目的とする欲求を「生存欲求」と呼び、何らかの生きる価値の実現のために生きようとする欲求、いわば生きることが価値の実現に対して手段的である欲求を「実存欲求」と呼び換えてみると、生存欲求は実存欲求にとっては手段的なものであるということが、概念的には成立する。しかし、同

時に生存欲求は実存欲求を根底から支える基盤でもあるため、両者が相互依存的な関係にあることが判明するのである。マズロー理論の欠陥とは、両者をしっかりと見据えつつも、初期条件においては前者が後者に還元されるものとしてしか考えられていないため、初期条件においても前者と後者とが入れ替わりうる可能性を排除してしまう理論構造になっている点である。だから、前出の前平が“生存の境界値の決定は階層づけられた下方からなされるというのではなく、何らかの社会的命令が下されれば生存することすら放棄しかねないのが、人間である”³⁸⁾という指摘を盾にして欲求階層論を批判するとき、反批判できる余地はないのである。

Ⅲ 学習課題論に向けての試論的構成

これまでの議論は、マズローの欲求理論に内在して、理論を解体すると同時に、筆者なりの視点に基づいてある程度まで構築作業を進めるものであった。今度は、マズロー理論を基盤に置きつつも、生涯学習実践にとってより実践的有効性の高い学習課題論を提起するという方向で考察を進めていくことにする。

A 欲求理論の構成要素

欲求には、直接的には他者の媒介を前提とせずに個体論的に語りうる側面と、個体と他者との関係性を直接的な前提としなければならないという意味で関係論的側面とがある。そして、原理論的課題としては、欲求を据えるためには、少なくとも二つの次元、すなわち「手段-目的」軸と「個性性-関係性」軸とを重ね合わせる必要がある。常に、このような立体性と相互関係を意識してこそ、欲求についての分析は有効なものになると言えるだろう。この点を意識して、抽象レベルでマトリックス化を行なうと、図表2のようになる。

図表 2

	個体的欲求	関係的欲望
手段的欲望	何かの上位の欲求の満足のための手段としての欲求	何かの満足の手段として他者を求める欲求
自己目的的欲望	それ自身が満たされることで完結するような欲求	他者そのものを目的として求める欲求

たとえば、自己表現欲求とは、現代日本において非常に盛り上がっている欲求である。この欲求は、自己を表出したいと願うものだが、その主体が単独に満足を獲得することは不可能であり、顕在的・潜在的とを問わず、必ず何らかの他者の存在を前提とするものである。その

意味では、個体論レベルでは自己表現することが自己目的でありながらも、他者との関係を形成することを潜在的に求めている点では、関係形成のための手段的欲望であるという両義性を持っている。

B 生きがい欲求の位置づけ

筆者は先に、生存欲求と実存欲求との二分法を導入した。日本的な言葉である「生きがい」とは、実存欲求に極めて近い概念であろう。

神谷美恵子は、生きがいという言葉について、“生きがいの源泉、または対象となるものを指すときと、生きがいを感じている精神状態を意味するとき”との二つの場合を分けている³⁹⁾。この二分法を筆者なりに解釈し直すと、生きがいには、自分がこれまで生きてきた意味および今後生きていこうとする意味を理解させてくれる理性的側面と、生きていく実感を感覚的に味わうというような感覚的側面とがあるということになる⁴⁰⁾。

いずれの場合においても、「生きがいは死にがいである」という逆説的な言い方に象徴されるように、生きがいこそが人間の生を根底から支え、時には死へ無限に近づこうとする原動力となる場合がある。たとえば、この人のためには自分の命すら惜しまないという場合は、自分自身の生きる意味としての生きがいが生死の境界線にまで突出してきた例である。また、たとえば暴走族が自分の限界に挑戦するという名目でギリギリまでスピードを出そうとするのも、単に自己顕示欲だけでなく、生死の境界においてこそ、スリルとともに「いま生きている」という実感を感覚的に味わえるからではないだろうか。とにかく、自分自身が生きている価値を確認するというレベルで積極的に死へと近づきたがるという逆説には注目しておかなければならない。このような側面を指摘したのは、人間の欲求理論のレベルにおいて、「生存-生きがい」が、単に縦に並んだ連鎖的關係としてだけでなく、部分的には並列的關係としても描かれなければならないことを示すためである。

C 欲求領域の三角形

これまでの議論をとりあえず総括するための試論を展開しておこう。

第一に、生存欲求と実存欲求との間には質的な段差があることを確認し、中間領域を想定することにより、生存欲求が無限展開しうる側面をフォローする。この領域について、「生活向上欲求」という名称を与えることにする。この欲求は、生存基盤が確定していることを土台として、この延長上に生活を維持したり、未来に向けて向上させようとするものである。このような用語法の使

用に伴い、生存欲求のうち基盤的なものを「生存確定欲求」と言い換えることにしよう。

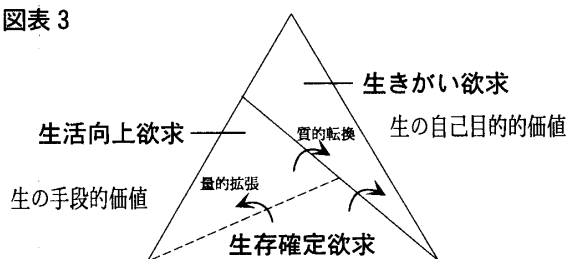
第二に、生存確定欲求と生活向上欲求とは、前者を後者が量的次元で拡張・拡大したという意味で連続的であるが、これらと「生きがい欲求」とは質的に異なるものであり、これらを質的転換させたものが生きがい欲求であるということである。生存確定欲求と生活向上欲求とは生きるための手段的価値を持つものであり、生きがい欲求は、生きるための目的的価値を創造する欲求として位置づく。

第三に、原理的に言えば、生存確定欲求は自己完結するはずのものであるが、生活向上欲求と生きがい欲求とは無限展開しうるものである。つまり、前者が「閉じた体系」の欲求群を形成するのに対して、後者のグループは「開いた体系」の欲求群を形成する。

第四に、生存確定欲求と生きがい欲求とが、単に前者が後者より規定的のみならず、双方が並列になりうる可能性を十分に考慮することである。いわば、死ななために生きようとする欲求と、生きる意味の確認のためには死すら厭わない欲求とが交換しうる極限点を設定することである。

以上の点を意識しながら図式化を行なうと、図表3のように表現できる。これらの三つの領域は、個々のライフステージに特有であるとみなされる課題を指摘していくような発達課題論とは別次元に構成される「生きる課題」論であると言えよう。むしろ、この三領域は、原理的には、ライフステージごとであれ、地域ごとであれ、また別の軸を用いた場合であれ、生涯学習の学習課題を考える上で一貫して見据えていくべきものを参照していく目安ということになる。

図表 3



まとめにかえて

最後に示した「欲求領域の三角形」は、生涯学習実践を進めていく上で常に意識化されるべきポイントを抽象レベルで図式化したものとなっている。では、なぜ、このようなことが必要かつ重要なのか。

たとえば、人権が大切だというのは、一般に誰もが否

定しようのないことである。しかし、人権の大切さが強調される割には、その人権の中味は案外に明らかになっていないのではないだろうか。まして、人間の生に基づいて原理的な検討を行なおうという問題意識は乏しいと言えるのではないか⁴¹⁾。人権の内実について十分な解答が不明なまま、主観的な信念を場当たりに述べているという事態であるとまで言っても決して言い過ぎではないだろう。人権の根本には「生命」があるだろうが、人権という抽象的な用語に依存している限りにおいて、案外とこの当たり前のことが見えにくくなってしまふ。このような状況において、「欲求領域の三角形」は、常に人間が生きるということはいかなることか、という哲学的課題を本質論的かつ全体論的に突き付けてくる。筆者が実践的便宜を優先させた図式を提示したのは、このような効能のためである。したがって、これは安易に教科書化されるべきものでなく、むしろ発展的に解消させていくべき叩き台にすぎない。それにもかかわらず、この図式は、「生きるとはいかなることか？」という問いを「いかに生きるべきか？」という当為論的文脈に置き換えて、人間の弱い部分や醜い部分も含めて「人間の実際の生きる姿はいかなるものか？」という、冷徹な事実認識的な問いがまだ不十分な教育学においては、当分の間は有効に機能させていかなければならない⁴²⁾。

〈注・引用文献〉

- 1) このことに関連して、佐々木英和「自治体計画にみる生涯学習概念に関する一考察——生涯学習行政分析論の基礎考察として——」（日本社会教育学会編『日本社会教育学会紀要』No.31, 1995年所収）を参照のこと。
- 2) これについては、佐々木英和「自己実現概念の変容と生涯教育政策」（東京大学教育学部社会教育学研究室編『社会教育学・図書館学研究』第19号, 1995年所収）を参照のこと。
- 3) 筆者は、「普遍主義」に対しては反対の立場を取るが、だからといって「普遍性」までも否定するというわけではなく、前者と後者とを分けて考える。
- 4) 真木悠介『人間解放の理論のために』、筑摩書房、1971年、97頁。
- 5) 小阪修平は、“ポストモダンが「ほんとうのもの」をしりぞけるあまり、見失っていたこと”の一つとして、このことを指摘している（小阪修平『「哲学ブーム」の底にあるもの——『自分知りたいたい』人間の欲望——』、朝日新聞、夕刊、1995年9月26日）。
- 6) エドワード・ホフマン『真実の人間——アブラハム・マズローの生涯——』（上田吉一訳）、誠信書房、

- 1995年, p. viii。
- 7) Maslow, A.H., *Motivation and Personality, second edition*, Harper & Row, 1970, pp. 35~47. 小口忠彦訳『人間性の心理学 改訂新版』, 産能大学出版, 1987年, 56~72頁。
 - 8) 駒井洋編『自己実現社会』, 有斐閣, 1987年, 5頁。
 - 9) Maslow, A.H., *The Farther Reaches of Human Nature*, Viking Press, 1971, p. 45. 上田吉一訳『人間性の最高価値』, 誠信書房, 1973年, 56頁。
 - 10) 前平泰志「成人の異文化教育——その比較可能性と方法論的課題——」, 日本社会教育学会編『多文化・民族共生社会と生涯学習』, 東洋館, 1995年所収, 183頁。
 - 11) 同上。
 - 12) 同上。
 - 13) 同上, 184頁。
 - 14) 同上。
 - 15) このような作業は, 佐々木英和『『自己実現』の批判的検討とその展望』(東京大学大学院教育学研究科提出・修士論文, 1992年)において行なっている。
 - 16) この点については, Maslow, A.H. (1971), op.cit., 前掲訳書(1973年)から十分確認できる。
 - 17) Maslow, A.H. (1970), op.cit., pp. 39~43. 前掲訳書(1987年), 61~67頁。
 - 18) フロイトが晩期に提案した「死への本能(=タナトス)」をどのように捉えていくべきかについては今後の課題であるが, これに間接的に関連した議論は, 後ほど展開することにしてしよう。
 - 19) Maslow, A.H. (1970), op.cit., pp. 43~45. 前掲訳書(1987年), 68~71頁。
 - 20) Ibid., 45. 同上, 70頁。
 - 21) 真木悠介は, 人間の欲求を“必要”, “要求”, “欲望”という三つの層位に分けて, 「必要」が完結可能であるのに対し, 「要求」が無限に拡大する傾向性であるとしている(真木, 前掲書, 107~110頁)。
 - 22) Maslow, A.H. (1970), op.cit., p. 46. 前掲訳書(1987年), 72頁。
 - 23) Ibid. 同上。
 - 24) Ibid. 同上。
 - 25) Ibid., p. 162. 同上, 242~244頁。
 - 26) Ibid., p. 47. 同上, 72~74頁。
 - 27) Ibid., pp. 48~51. 同上, 74~79頁。
 - 28) Ibid., p. 51. 同上, 79頁。
 - 29) Ibid., pp. 51~55. 同上, 80~85頁。
 - 30) マズローの関心は, 「至高体験」や「自己超越」といったものへと移っていった。この点についても, Maslow, A.H. (1971), op.cit., 前掲訳書(1973年)から十分確認できる。
 - 31) Maslow, A.H., *Toward a Psychology of Being*, Van Nostrand, 1962, p. 21. 上田吉一訳『完全なる人間——魂のめざすもの——』, 誠信書房, 1964年, 1979年新装版, 40頁。
 - 32) Ibid., p. 22. 同上, 43頁。
 - 33) Ibid., p. 23. 同上, 44頁。
 - 34) この点を視覚的に図式化したものとしては, フランク・ゴープル『マズローの心理学』(小口忠彦訳), 産能大学出版部, 1972年, 83頁を参照のこと。
 - 35) Maslow, A.H. (1971), op.cit., pp. 5~7. 前掲訳書(1973年), 7~9頁。
 - 36) 上田吉一「訳者あとがき」(上田, 前掲訳書, 1964年, 292頁)。
 - 37) Maslow, A.H. (1970), op.cit., p. 21. 前掲訳書(1987年), 34~35頁。
 - 38) 前平, 前掲論文, 184頁。
 - 39) 神谷美恵子著作集1『生きがいについて』, みすず書房, 1980年, 15頁。
 - 40) 時間論的枠組みを用いて説明するなら, 前者は, 生活時間を時間軸上で立体化しようとする生きがい概念であり, 後者は生活時間を瞬時に凝縮しようとする生きがい概念であるということになる。
 - 41) 日本教育学会編『教育学研究』第62巻第3号(1995年)では, 「人権と教育」という特集を組み, 9本の論文を掲載している。人権をめぐる具体的な問題が様々に明らかにされている点では評価できるものの, 人権そのものの内実を原理的に明らかにするという意味ではまだまだ不十分である。
 - 42) たとえば, 阪神・淡路大震災は, 物質的な豊かさの影で見えにくくなっていたが, 生命・生存が基盤となってこそ生活が成立していることを痛感させた。しかし, 一方で, 生存や安全の確保は生きるための必要条件であっても, 必ずしも十分条件ではないということを確認しなければ, 状況の変化に振り回された表層的な研究しか生産されなくなるだろう。生存のためのエゴイズム, 実存のためのエゴイズムといった, 一般に負の側面とされるものがどのように教育学研究に位置づけるのかも含めて, 多面的な研究姿勢が望まれる。